

最終痴漢電車

3

原作◆アトリエかぐや
著者◆水崎睦月
原画◆M&M

 KAGUYA
TEAM HEARTBEAT PRESENTS



序 章

5

標的1 川原繪美

25

標的2 柏木あいり

45

標的3 森 美里

103

標的4 凰 優香

126

標的5 斎藤千尋

150

最終痴漢電車

215

終 章

230

■ ■ ■ 序章

断続的な振動に身を任せながら、天野哲雄はあくびをかみ殺した。

車窓にはローカルな田園風景がどこまでも広がり、流れていく。外界はあくまでも優雅なのに、天野はその見晴らしとは正反対の局地的高人口密度の中にいた。

桂木坂にある天野の家から、彼の勤め先である羽山鉄道駅舎までは、ライバル社の路線に乗らなければならない。地下鉄にも乗り入れているこの北部鉄道の電車は、天野にとって快適なものではなかつた。桂木坂駅の先にあるベッドタウンのせいで殺人的に混んでいるし、なにより品のないモーター音が好みではないからだ。

電車好きが高じて鉄道会社に勤めている天野にとって、自社で使っている羽山8000系こそが最高級品だった。フォルムもモーター音も申し分ないし、今時めずらしい空気ブレーキ感覚も気に入っている。なにより走行中のあのやわやかな振動が心地よかつた。

すでにすし詰め状態だというのに、停車駅に着くごとに新たな人たちが乗り込んでくる。天野はあくびの次はため息を押し殺し、つり革の上の鉄パイプを掴み直した。

『会議だか報告会だか知らないが、なんで俺がそんなもんのために貴重な休日の朝にこんな混んだ電車に乗らなきやならないんだよ——つたく』

考えまいとするそばから、やるせない気持ちが込み上げてくる。世間は平日でも、天野には大切な休養日なのだ。しかも、通常のシフト交代ならこんな時間に乗り合わせることはないのだが、今日は特別招集がかけられていた。

天野は混んでいる中でなんとか確保した足場を奪われないようにしながら、早く乗り換え駅にたどり着くことだけを願っていた。

「このチンタラした走りがなつちやいないんだよな。……ま、駅間が狭いから仕方ないか」停車駅での乗降が終わり再び電車が走り出したところで、天野はある気配に気づいた。天野のすぐ脇の女が、もぞもぞと身を捩っては、持っているバッグを橐かせていく。しかもその眉は困つてでもいるように顰められていた。

「——ははーん？」

さりげなくその女の後ろに目をやると、案の定、その背後に男がぴつたりと張りついていた。ご丁寧に野球帽を目深に被り、黒っぽいジャンパーを着ている。

「おいおい、痴漢の制服つてくらい王道なカッコしてよ。天然記念物モンだな——」天野は鼻で笑つてしまいそうなのを堪え、女に目を向けた。どうでもいい痴漢野郎を見るより、その方がずっと目に愉快いと思えたからだ。

女は目鼻立ちのはつきりした美人で、いやがつている顔がなかなかに天野好みだった。眉を顰めても見られる顔というものはそうあるものではない。

「……やつ……」

やめてくださいと言いたいらしいが、恥ずかしくて声が出せないようだ。

天野は『お手並み拝見』と心の中で呟き、脇で行われている痴漢行為を窺うことにしてしまった。しかし。ほんの三分で怒りが込み上げてくる。

「なんだ、その触り方は？——素人のデキゴコロとでもいうのか？ナシだろ!?』

痴漢男は必死で手を動かしているようだが、その動きは、天野から見れば心底なつていなかつた。今どき、小学生のガキですらもう少しまともなお触りができると思える。

もちろん、女の顔はいつまで経っても嫌悪感しか表していない。あの触り方で女の顔に恍惚の表情を浮かべせるには、オリエント急行ぐらい長い路線が必要だ。

我慢しきれなくなつた天野は、すっと手を伸ばしその男の手をつねり上げた。男はびくりとすぐみ上がり、混んだ電車の中で無理にそこを離れようと蠢く。痴漢は大概罪悪感を抱えているので、はつきりした拒絶か、ほかからの助けが入つた場合、今の男のような行動を取る。まれに窮地に陥り逆ギレするバカもいるが——。

俯いていた女が顔を上げ、感謝の表情を天野に見せる。しかし天野は口の端をつり上げ笑顔を返すと、そのままその女の尻をぎゅうっと掴み上げた。

「…………きやつ」

悲鳴を上げた女の肩をそのまま抱き寄せる。

「丈夫ですか？　この先揺れるのでよかつたら俺に掴まつてていいですよ？」

親切さを滲ませた声でそう告げ、そのまま密着させた股間のあたりを撫で上げた。

「……いつ……」

いやという言葉を言い出す前に、天野はすばやくスカートの中に手を差し入れた。ミニのタイトというのは、手は入れやすいが、動かすのはなかなかに難しい。天野が思うに、学生服のプリーツスカートがこの世で一番痴漢行為に向いた服装だ。手が突っ込みやすいし、生地が厚いので動かしても周りに気づかれにくい。——もちろん、視覚的に興奮するというのが一番のポイントだが。

ストッキングのセンターの縫い目を撫で上げると女が竦んだように身を強ばらせた。

天野が女の耳のあたりに息を吹きかけながら執拗にそこを撫で続けると、次第に女の強

ぱりが解け力が抜けていく。

次の停車駅に着きドアが開くと、天野は女が逃げられないよう軽く肘を掴んで、指を動かし続けた。人の乗り降りで車内がざわついた拍子に女のストッキングを爪で破く。

「……っ」

女がびくんと身を震わせ、小さく息をのむ。天野は空けた穴を手のひらで押し広げ、その中の下着に直接触れた。ストッキングのときと同じように何度も何度もそこを撫で上げ、ふいにそのショーツの脇から指先を滑り込ませた。

「……ひあつ……」

女の悲鳴に周りの視線が集まる。

「大丈夫ですか？——もうちょっとで着きますから」

天野はやさしく笑いかけ、さもやさしく具合の悪い女を介抱しているふうを装つた。その平然とした様子に、女の目に恐怖の色が浮かぶ。

「すぐに楽になりますよ」

天野は女にもう一度笑いかけ、差し入れた指を動かした。

「…………っ！」

女は恥ずかしさのあまりか、悲鳴をのみこんでいる。天野は人差し指と薬指で外陰部を押し開き、中指の腹を使って先端の蕾と割れ目にそつと触れた。女のソコはすでにぬめりを帯びていた。天野は濡らしているこの女がもう声を出すことはないと確信し、つんと硬くなつて自己主張している陰核を丹念に撫でまわしはじめた。

「…………ひ…………あんっ」

ぬめりを絡めクリトリスに当たるように中指をスライドさせると、女の口から甘い吐息が漏れる。天野は指の動きを速め、次第に刺激を強めていった。

「…………あ…………やあ…………っ」

電車の振動に合わせて摩擦を強めると、女が天野にしがみついてくる。

女の息は荒く、顔は熱く紅潮している。

そこはすっかりトロトロで、なんでも受け入れられるくらいになつていた。

「…………はあ…………うつ」

だが天野は第一関節までしか入れてはやらずに、執拗にクリトリスを責め続けた。すでにソコは剥けてしまつたようで、女はビクビクと過剰な反応を示している。

天野はその耳元に顔を近づけ、囁いた。

「こんなに大きくして、いやらしいクリトリスだな？」

女がびくんと身体を強ばらせた。

「ふああ…………ダメ…………んつ、くう……さ、触らないでえ……、ああ…………つ」

女は天野の腕の中で泣きそうな声で懇願する。

「まもなく、駅に到着いたします。お出口は変わりまして右側。右側です——」

天野は車内アナウンスを耳にして、指の動きを速めた。

「あ、いやあつ…………ダメ…………ん、そんなに強く…………んああ、さ、触らないで……」

「ほら、——イケよ？」

そう言うなり指先でそれをつねり上げると、女は自分の口を自分で塞いだ。

「…………ひあ…………んつ！」

身体中が強ばり、そのあとすぐに弛緩した。

